

菊池寛「恩讐の彼方に」論

―大正期の仇討ちのイデオロギーを探る―

齋藤 千帆

一、はじめに

菊池寛の出世作と言えば、「忠直卿行状記」（『中央公論』大正七年・九月）と「恩讐の彼方に」（『中央公論』大正八年・一月）である。「恩讐の彼方に」は、大正八年一月号の『中央公論』に発表された。大正八年七月春陽堂刊行の『我鬼』、大正一〇年七月には、新潮社刊行の『菊池寛傑作集』に所収されている。後には、「敵討以上」（『人間』大正九年・四月）と題名を改めて戯曲形式に脚色されている。また、「恩讐の彼方に」と「敵討以上」を合わせて書いたと思われる小説、「青洞門物語」（『富士』昭和七年・一月）がある。このことから、菊池にとって「恩讐の彼方に」は重要な作品であると考えられるだろう。また、江戸時代の仇討ち物は、仇を討つ、もしくは討たなくとも仇と和解することがない物語展開が主流だが、「恩讐の彼方に」は、仇を討たずに和解する物語構成となっている。その

ことから、「恩讐の彼方に」とは、江戸時代の仇討ち物と比べると特異な性質があると言えるはずだ。そこで「恩讐の彼方に」の仇討ちに対するイデオロギーの特徴と意味を追求していきたい。

二、「恩讐の彼方に」の創作背景について

主人・中川三郎兵衛の愛妾お弓との仲が露顕し、主人を殺してしまったために逐電した市九郎は、昼に茶店をやりながら強盗を働き、お弓と三年ほど暮らしていた。しかし、お弓の強欲さに絶望して出家し、了海と名乗り諸国を遍歴する。その後、豊前耶馬溪の難所を知り、隧道開鑿を志す。そこへ父の仇を討つために実之助がやってくる。しかし、了海の悲願を知り実之助は、協力して了海と共に隧道を掘り始める。その一年と六か月後、了海が掘り始めた二二年目に開通し、すべてを忘れて、了海と実之助は共

に喜びを分かち合うのであった。これが、「恩讐の彼方に」の大雑把なあらすじである。その内容は、大分県の耶馬溪にある青の洞門にまつわる伝説と似通うところがあり、実際、菊池は大正一三年一〇月に発表された『文藝講座』の「歴史小説論」の中で、

自分の「恩讐の彼方に」は(中略)い、話なのだが、自分は此話を耶馬溪の案内記で見たのである。

と述べている。そのことから、青の洞門にまつわる伝説を菊池が「恩讐の彼方に」の題材にしたことは間違いないだろう。

吉川英治の「恩讐の彼方に」の「解説」の中で

菊池氏は、近藤浩一路画伯の漫画で、その話を知り、小説にしたものがある。

と述べられている。この吉川の「解説」は、実は菊池自身が書いたという証言もあるが、とりあえずは、吉川が書いたものと見なして考えて行く。「近藤浩一路画伯の漫画」とは、『読売新聞』に連載していた挿絵入りの紀行文「耶馬溪見物」の大正六年一二月三日に記載された連載第六回目の青の洞門にまつわる伝説を簡単に紹介した記事のことである。簡単な紹介であるため、菊池が「近藤浩一路画伯の漫画」のみを参照して「恩讐の彼

方に」を書いたとは考えづらい。「近藤浩一路画伯の漫画」は「青の洞門」にまつわる伝説を知るきっかけとなった作品というだけで、おそらく菊池は、他の資料も参考に行っていると考えられる。

菊池が「恩讐の彼方に」を書く上で参照した資料「耶馬溪の案内記」については、これまでも論じられてきた。重友毅氏(1953)は、大町桂月の「雪の耶馬溪」、谷口梨花の『増訂汽車の窓から(西南部)』、また「耶馬溪の案内記」ではないが「三人法師」を参考にして書いた可能性が高いと考えられており、三瓶達司氏(1970)は、小川果仙(古吉)の『耶馬溪案内記』と「三人法師」を参考にしたと述べている。片山宏行氏(1991)は、千葉亀雄の『日本仇討物語』、田中貢太郎の「青の洞門物語」、小川果仙の『耶馬溪案内記』を参考にした資料として挙げている。大西良生氏(2002)は、小川果仙の『耶馬溪案内記』だと考えており、李志新氏(2016)は、山本艸堂の『耶馬溪案内記』だと考えている。まとめると、先行論で多く論じられている「恩讐の彼方に」の参考資料は、

- ・『御伽草子』『三人法師』(室町時代〜江戸時代初期頃成立)
- ・小川果仙『耶馬溪案内記』(明治三八年一〇月)
- ・山本艸堂『耶馬溪案内記』(大正二年一二月)
- ・大町桂月「雪の耶馬溪」(大正六年二月)
- ・千葉亀雄『日本仇討物語』(大正六年六月)
- ・田中貢太郎「青の洞門物語」(大正六年一〇月)
- ・谷口梨花『増訂汽車の窓から(西南部)』(大正七年六月)

この七つが挙げられる。「三人法師」以外の六つの資料は、青の洞門にまつわる伝説を元にしており、旅の僧、禅海和尚が鑿と槌だけで享保二〇（一七三五）年から明和元（一七六四）年の三〇年間をかけて全長三四二メートルの洞門を完成させることにより、父の仇討ちに來た実之助が仇である禅海和尚を許し江戸に帰るといふ物語構成で成り立っている（年数は、資料によって異なっている）。

「恩讐の彼方に」は全四章で構成されている作品である。

第一章は、市九郎が主人を殺害してから逐電するまでの場面、第二章は、市九郎の逐電後の生活から出家するまでの場面、第三章は、市九郎が了海と名を改め、隧道開鑿を始める場面、第四章は、実之助の登場から隧道開鑿を終えて実之助と和解する場面となっている。先ほどあげた七つの文献との共通点を章ごとに分けて見ていき、菊池が「恩讐の彼方に」を描く上で、参照した可能性が高い資料を考察していきたい。

市九郎が逐電するきっかけとなる第一章の部分は、「恩讐の彼方に」同様、果仙、艸堂、桂月、亀雄、貢太郎、梨花の六つには主人を殺害したために逐電することになったのだと記されている。

・果仙 「暗殺して通る」とのみ記載。

・艸堂 「痴情の果から主人を斬って江戸を立ち退いた」とのみ記載。

・桂月 「主を暗殺して奔り」とのみ記載。

・亀雄 「故あつて此主人の四郎兵衛を暗殺したらしい。其儘江戸へ飛び出して方々を漂浪した挙句」と記載。

・貢太郎 主人の妻に狼藉を働こうとしたことよつて屋敷を追い出され、その後、主人を殺害し、逐電する。

・梨花 「事によつて其の主四郎兵衛を暗殺して諸国に放浪」とのみ記載。

市九郎が出家するきっかけとなる第二章の部分は、果仙、貢太郎の二つは妻（「お弓」に当たる人物）の浅ましさが原因と「恩讐の彼方に」と共通している。また、妻の浅ましさが原因で出家する場面は「三人法師」ともよく似ている。他の四つには、市九郎が出家する決定的なきっかけは記載されていない。

市九郎が了海和尚と改名し、隧道開鑿を始める第三章に当る部分は、果仙、艸堂、桂月、亀雄、貢太郎、梨花の六つとも「恩讐の彼方に」同様、大誓願を持つて隧道開鑿を始めるが、果仙、艸堂、貢太郎の三つは村人の反応、様子にも触れている。

・果仙 「享保年間江戸の僧禅海、適馬來て其崎嶇艱難の状を見、即大誓願を發し、石を鑿ち路を通じ以て没溺の患を救はんと欲す直に槌を執り鑿して而して進むときに附近の村氓、洒然として怪笑す（中略）初怪笑せし者終に其心力勇銳誓願の聲固なるを感じ財施し力施し勸讚隨喜す」と記載。

・艸堂 「禅海は（中略）石工岩野平右衛門を頭領として槌鑿の音勇ましく開鑿に着手した、里人の或者は彼の無謀なる此企を笑ひ、或る者は其突飛なる行動を嘲けた（中略）幾多毀誉褒貶の内に立つて着々其工を進め禅海の頭に霜を置く頃には既に工事も八分通り出来上がつていた」と記

載。

・貢太郎 禅海和尚を始めの方は「狂人」と馬鹿にしているが、洞門開鑿が進むにつれて感心していく村人を描いている。

実之助が登場し、隧道開鑿を達成する最終章の第四章にあたる部分は、果仙、艸堂、桂月、亀雄、貢太郎、梨花の六つの資料とも、実之助に三年の猶予を得て隧道開鑿をし、最終的に実之助と和解している。しかし、貢太郎のみ隧道開鑿を見届けずに和解している。

・果仙 隧道開鑿後、中川四郎兵衛の霊に供養し、それを見届けた実之助は、江戸に帰り、一族に語って聞かせた。

・艸堂 隧道開鑿後、跡田村庄屋と柿坂村善正寺の住職が実之助に禅海を許すように説得。実之助はそれを受け入れ江戸に帰る。

・桂月 隧道開鑿後、中川四郎兵衛の霊を供養し、禅海は「これにて我事畢れり、いざ君の志を果たしたまへ」と首を差し出すが、実之助は刀を抜かず、江戸へと帰る。

・亀雄 隧道開鑿後、中川四郎兵衛の霊を供養し、「いざ今こそ首を打たれい」と眼を閉じたが、「既に立派に悪業を償って餘りあるものである」と実之助は禅海を許し、江戸へと帰る。

・梨花 隧道開鑿後、中川四郎兵衛の霊を供養し、実之助は禅海を許し江戸へと帰る。

以上の場面から、「恩讐の彼方に」と共通している箇所が多いのは果仙の『耶馬溪案内記』であることが分かる。つまり、菊池は果仙の『耶馬溪

案内記』を参照にして「恩讐の彼方に」を描いた可能性は高いということが言える。しかし、第一章の逐電するきっかけとなる主殺しは艸堂の「痴情の果」という記述や貢太郎の小説の方が、果仙よりも詳しいと思われる。他にも、第四章の実之助との和解シーンも桂月、亀雄の方が「恩讐の彼方に」と似ている。「恩讐の彼方に」は、小川果仙『耶馬溪案内記』以外にも参照にした資料があると考えるべきではないだろうか。以下、重要な場面ごとに、出典候補との関係を詳しく再検討してみる。

三、「恩讐の彼方に」第二章について

「恩讐の彼方に」の冒頭部分にあたる主人、中川三郎兵衛殺害から、市九郎とお弓の逐電までの第一章は、先ほども述べた通り、果仙、艸堂、桂月、亀雄、貢太郎、梨花の六つの資料ともに、主人を殺害し逐電するという流れは同じである。だが、何故主人を殺害することになったのかの理由については「恩讐の彼方に」の様な、主人の愛妾との仲が露頭したためだということ明記している資料はない。強いて上げるのならば、艸堂の「痴情の果」と、主人の妻に狼藉を働こうとした貢太郎の二つだけだろう。「恩讐の彼方に」では、主人の殺害の描写と背景は、細かく描かれており、逐電するまでの流れも丁寧に描いている。また第一章には、第四章まで登場しないはずの実之助が「当年三歳になる三郎兵衛の一子実之助」と名前だけ登場しているなど、今後の展開の伏線が張られている。そのことから、

菊池はこの冒頭を物語内でも大切な場面として扱っていることが考察できる。

それに対し、果仙、艸堂、桂月、亀雄、梨花は、「恩讐の彼方に」の冒頭部分にあたる主人殺害から逐電までの流れについては大して重視しておらず、この五つと「恩讐の彼方に」の第一章を対比して考えるのは難しい。貢太郎の作品に関しては、主人の妻に狼藉を働こうとしたところと「恩讐の彼方に」の主人の愛妾であるお弓との仲が露頭したという箇所が似ていると言えは似てはいるが、同じとは言えない。艸堂の「痴情の果」も、どのような「痴情」か分からない。つまり、この第一章から「恩讐の彼方に」の参考となった資料を判断することはできないと思われる。よって、「恩讐の彼方に」第二章以降から考察していくことにする。

「恩讐の彼方に」第二章の逐電後のお弓との生活から出家するまでの経緯についての参考資料を考える上で「三人法師」を外すことはできない。

「三人法師」とは、室町時代から江戸時代初期にかけて作られた物語草子である『御伽草子』の一つで、懺悔物と言われる出家遁世して草庵に入る動機・事情などを主題とした作品に分類される。内容は、高野山で修行する元武士で恋女房を殺されて出家した糟谷四郎左衛門、元強盗で妻の食欲に無常を感じたため出家した荒五郎 楠木一族の者だったが楠木正儀が敵方である足利氏に降伏したことにより出家した篠崎歸部助という三人の出家の発心由来談となっている。

先行論の中で問題になっているのは、元強盗だったという荒五郎の話で

ある。斬取強盗で生計を立てていた荒五郎が、ある時、一八、九歳の身分の高い女(実は糟谷四郎左衛門の恋女房)を殺害し、衣装を剥ぎ取って妻の元に持ち帰った。しかし、妻は、鬘にするとお金になる若い女の髪をそのままにして帰るとは何事かと荒五郎を罵り、女の髪を取りに向かった。女の髪を手に入れて喜ぶ妻に浅ましさを感じ、荒五郎は今までの自分の悪事を悔やみ出家したという話が荒五郎の出家譚である。

確かに、「三人法師」の荒五郎の出家譚は「恩讐の彼方に」の市九郎が出家するまでの流れと似ている。特に妻の強欲な姿を見ることで自分の悪事を悔やみ出家する部分が一致していると言えるだろう。また、荒五郎は、自身の出家譚を語り終えた後、四郎左衛門に恋女房を殺害した自分を殺すように言うが、四郎左衛門は出家した身だからという理由で荒五郎を殺さなかったなど、「恩讐の彼方に」の隧道開鑿直後の市九郎に対する妻之助の対応とも似ている箇所がある。だが、大きく異なる点も存在する。例えば、「恩讐の彼方に」で妻が求めたのは、被害者である女の頭についていた玳瑁の揃や筭であるが、「三人法師」は被害者である女の髪の毛である。「恩讐の彼方に」の被害者は夫婦と二人であるのに対し、「三人法師」の被害者は妻ただ一人である。

菊池が参照した可能性が高い資料の一つ、果仙の『耶馬溪案内記』の「父老の口碑」に「髪具も珍重のものならん(後略)」と記述がある。その箇所を引用する。

左に父老の口碑一二を記し識者の教を待つ

○禅海主を殺し江戸を通れたる後、暫く木會山中に潜伏して山賊をなす此時禅海携へたる妻あり(出所不詳)或夜禅海其拐取せる貨物を包みて持ち歸りけるに妻(中略)髪の具も珍重のものならん(中略)疾く見せられよと云ひければ禅海(中略)奸悪邪見に長ぜるの甚しきやと茲に迷夢を破り會心懺悔遂に妻を去りて

次に「恩讐の彼方に」から、果仙と共通する箇所を引用する。

彼は、何時となしに信濃から木會へかゝる鳥居峠に土着した。(二七三頁)

「さうだよ。頭物だよ。黄八丈に紋縮緬の着付ぢや、頭物だつて、擬物の櫛や笄やあるまいぢやないか。わたしは、先刻あの女が菅笠を取つた時に、ちらと睨んで置いたのさ。瑠璃の櫛に相違なかつたよ」と、お弓はのしかゝるように云つた。(二七六頁)

彼は一刻も早く自分の過去から逃れたかつた。(中略)まして自分の凡ての罪惡の、萌芽であつた女から、極力逃れたかつた。彼は、決然として立ち上がった。(二七七頁)

以上の引用から分かる通り、果仙の『耶馬溪案内記』は、「恩讐の彼方に」とかなり似ている。貢太郎の「青の洞門物語」でも妻の浅ましきから出家を決意するが、「頭物も好い物を指してゐたのだらう、櫛なんかは何うしたの」と部下に尋ねた妻に「浅ましい奴だ」と感じて出家する。そのことから、貢太郎の「青の洞門物語」は、妻の取りに行くという行動で浅ましきを感じる「三人法師」と果仙とは異なり、妻の言葉で浅ましきを感じていると言えるだらう。「恩讐の彼方に」はどうだらうか。「恩讐の彼方に」の市九郎は妻が「悪事を為しているのを、静かに傍観することによって妻に対し、浅ましきを感じて出家する。貢太郎のように言葉が決定的なきっかけになつてゐるわけではないことが分かる。

また、果仙の『耶馬溪案内記』にも貢太郎の「青の洞門物語」にも女を殺害したという描写はあるが、それが夫婦でいて夫の方も殺したという描写はつきりとはない。つまり、夫の殺害というのは菊池のオリジナルと言えるのではないだらうか。

先ほど紹介した吉川英治氏の「解説」の中で

たゞ、主人公が、自分の情人が自分以上の兇惡なのを知つて、悔悟すると云ふ話は、この伝説より遙か古い「三人法師」と云ふ物語にある。その物語は、南北朝時代のものである。菊池氏は、終戦後その「三人法師」を小説化して「新今昔物語」に収めてゐる。

と、「三人法師」について触れられている。菊池の「三人法師」は昭和二年四月号『苦楽』に発表された。内容は、原作の「三人法師」とほぼ変わらない。吉川氏は、「恩讐の彼方に」との共通点を明記していないことから、ただ似ている作品として「三人法師」を挙げているだけのようにも思われる。また、全体構成を見ていくと「恩讐の彼方に」の実之助と「三人法師」の四郎左衛門は、どちらも仇である相手を殺さないという大きな共通点があるが、根本的な部分が違うような気がする。「恩讐の彼方に」は、共に作業を行うことによって仇討ちという目的を忘れてしまうことで相手を許すが、「三人法師」は出家したことによって仇討ちを行ったとしても無常だから仇討ちを行わないという、仇討ちを行わなかった理由が大きく異なっている。菊池が「三人法師」を原作通りに描いたことも考慮すると、「恩讐の彼方に」を書く上で「三人法師」は参考にしなかったのではないだろうか。いや、参考にしなくとも、果仙を参考にして充分に書いたのではないかと言った方が良くかもしれない。つまり、「恩讐の彼方に」は「三人法師」、貢太郎ではなく果仙を参照して、この第二章を描いた可能性が高いのではないかと考えられる。

四、「恩讐の彼方に」第四章前半について

「恩讐の彼方に」第三章の市九郎が出家し、了海と改名して隧道開鑿を始めた場面と似ている資料は果仙、艸堂、貢太郎の三つである。「恩讐の

彼方に」は、了海和尚一人で穴を掘り始めていたが、掘り始めて一八年目に「狂人坊主」と馬鹿にし続けた村人たちが心を入れ替え、隧道開鑿に参加している。果仙、艸堂、貢太郎の三つも「恩讐の彼方に」同様、馬鹿にし続けた村人が、作業が進むにつれて改心して隧道開鑿に協力している。また、果仙は、禅海和尚一人で掘り始めたのか、石工に協力して掘り始めたのかについての記述はないが、艸堂は石工に協力してもらいながら隧道開鑿を始めているのに対し、貢太郎は「恩讐の彼方に」同様、一人で隧道開鑿を始めている。しかし、貢太郎の作品には、村人たちが禅海和尚を認めた後、財物のあるものは資力で、資力のない者は労力で隧道開鑿に協力したとあるが、石工などの専門職を具体的に記載しておらず、それ以降の村人の登場はなく、禅海と実之助のみで物語は進んでいく。この三つの文献から「恩讐の彼方に」の第三章の参考資料を判断するには決め手に欠ける。よって、村人の市九郎に対する反応以外で大きな共通点がない第三章から「恩讐の彼方に」の参考資料となった文献を判断するのは難しい。

「恩讐の彼方に」においては、実之助の登場場面である第四章でも村人の存在は重要である。了海の隧道開鑿までの猶予を求めるのは村人、石工の役目だからだ。貢太郎同様、果仙、艸堂も実之助に猶予を求めるのは村人ではなく、禅海和尚本人である。桂月、亀雄、梨花も実之助に猶予を求めるのは禅海和尚本人だ。そのことから、おそらく、「恩讐の彼方に」の石工や村人から猶予を求めるのは、菊池のオリジナルだろう。了海和尚本人に言わせずに、石工や村人達に言わせることによって、実之助が猶予を

受け入れざるを得ない状況を自然と作り上げることに成功している。だが、村人に言わせるといふ発想に菊池が自力でたどり着いたのかというところではないのではと感ずる。確かに、石工や村人に言わせることで他の青の洞門を扱った伝説の文献より一層、小説らしくなったと思われる。しかし、原典通りに禅海和尚本人に言わせても別に不自然ではない。では、菊池はどこから村人に言わせるといふ発想を手にしたのか。

艸堂の『耶馬溪案内記』に洞門開鑿後、跡田村庄屋と柿坂村善正寺の住職が実之助に禅海を許すように説得をしたことを伝える記述がある。その説得を実之助は快く受け入れ、江戸へと帰省したことを伝えている。村人と実之助が、禅海和尚のことで関わる記述は、艸堂のもの以外見当たらない。この村人からの実之助への説得は、禅海和尚が村人たちに慕われる人格者であることを印象付ける効果がある。もし菊池が了海を許されても良い村人に慕われている人物として読者に認識させようとするならば、第四章前半の村人から猶予を求める場面以外で描くことはできないだろう。

「恩讐の彼方に」では、隧道開鑿直後で物語が終わっているため、実之助と村人たちが関わる場面がこの第四章前半以外にないからだ。つまり、菊池は、この艸堂の文章に影響を受けて、第四章前半を描いたのではないだろうか。また第一章の逐電するきっかけとなった主殺しに関して、艸堂の文章のみ「痴情の果」と「恩讐の彼方に」と似通うことを書いている。菊池が艸堂の『耶馬溪案内記』に目を通していた可能性は高いと考えられる。

五、「恩讐の彼方に」第四章後半について

先に第四章前半の実之助が了海和尚に猶予を与える箇所について触れたが、次は物語の最後の場面でもある、実之助が仇を許す場面の参考になった可能性が高い資料について考察していきたい。

果仙、艸堂、桂月、亀雄、梨花は、隧道開鑿を見届け、仇を許し、江戸へと帰省する。「恩讐の彼方に」も隧道開鑿を終え、二人で感動を分かち合うことによって、実之助は仇を許しているので、先に挙げた五つと同じ構成である。他の文献と異なり、「恩讐の彼方に」は、隧道開鑿を終えた直後で物語が終了し実之助と市九郎のその後を描いていないという相違点はあるが、それ以外の構成は大して変わらないので、隧道開鑿を終えた後の了海和尚の様子に注目したい。

「恩讐の彼方に」の隧道開鑿を終えた直後の了海和尚は

「いざ、実之助殿、約束の日ぢや。お斬りなされい。かゝる法悦の真中に往生致すなれば、極楽浄土に生るゝこと、必定疑ひなしぢや。いざお斬りなされい。明日ともなれば、石工共が、妨げを到さう、いざお斬りなされい。」(二九一頁)

と述べている。この了海和尚のセリフと同じようなセリフを桂月、亀雄の禅海和尚も言っている。まず、桂月から引用する。

「これにて我事畢れり、いざ君の志を果し給へ」と、首さし延ばす。されど、実之助は日本武士也。物の哀れを知る。刀は抜かずして江戸に歸り、事実を語りしに、一族みな感動して止まざりき。

次に亀雄の文を引用する。

「いざ今こそ首を打たれい」と静に觀念の眼を閉ぢたが、実之助も情ある武士の一人であった。「今になっておん身に刀を向けられるものではない、殊に僧侶になつて斯の通りの善根を積んで居ることは、既に立派に悪業を償つて餘りあるものである」と懇に説いて其罪を許した

桂月も亀雄も「恩讐の彼方に」と同じく、仇の方から首を差し出している。そして、「恩讐の彼方に」同様許されている。片山氏(1991)は、千葉亀雄『日本仇討物語』について、

菊池が、文学の先輩である千葉のこの著作に目をとおさなかつたはずはあるまい。というより、菊池が耶馬溪伝説に興味を抱いたそもそのものきっかけは、讐を遂げずに終わったこの仇討を、「一寸風変りな復讐談」として取り上げたこの著書にふれたことに始まるのではないか

と述べている。千葉亀雄とは、大屋幸世(1989)「千葉亀雄」によると、明治一一年九月二四日から昭和一〇年一〇月四日まで生きた評論家であり、ジャーナリストである。大正三年に時事新報に入社し、つづいて七年読売新聞・東京日日新聞と、大新聞社の社会部長・文藝部長・編集局長などをつとめた人物である。菊池は、大正五年一〇月に時事新報の社会部記者となつている。その経歴から、亀雄と菊池が先輩、後輩の関係であることが言えるだろう。だが、亀雄の『日本仇討物語』を参照にして書いた、もしくはそこから青の洞門にまつわる伝説を知ったかというところと釈然としない。それは、先にも述べた吉川英治氏の「解説」で

菊池氏は、近藤浩一路画伯の漫画で、その話を知り、小説にしたものである。

と述べられているからである。吉川の「解説」は昭和二三年三月二〇日に刊行された。刊行された当時は、すでに菊池は亡くなつてはいるが、この「解説」を書きあげた頃は、おそらくまだ菊池は生きていたはずだ。片山氏(1991)は、この吉川の「解説」を菊池が「吉川英治の名を借りて付した「解説」だと述べている。菊池が吉川の名を借りて書いたかどうかについては、ここでは論じないが、文末が「である」と断定的な言い方であるところから、この吉川の「解説」は信憑性が高いのではないかと考える。

この吉川の「解説」を踏まえると菊池が、青の洞門にまつわる伝説を知

ったのは、近藤浩一路画伯の漫画が発表された大正六年一月三日以降であり、それ以前に発行されていた資料にまず、目を通したのではないかと考えられる。そう考えると、他の「耶馬溪の案内記」と異なった情報を記載していない「恩讐の彼方に」が発表される前年の大正七年六月に発表された梨花の『増訂 汽車の窓から(西南部)』を参照にして書いた可能性は低いのではないかと思われる。大正六年二月に発表された桂月の「雪の耶馬溪」、大正六年六月に発表された亀雄の『日本仇討物語』は、菊池が「青の洞門」にまつわる伝説を知った直前に発表された作品であるので、目を通していてもおかしくはない。むしろ、目を通している可能性は高い。だが、それを参照して「恩讐の彼方に」を描いたのかというと、それはまた別の問題のように思える。

ここで、先ほど引用した「恩讐の彼方に」の了海和尚のセリフの後の実之助の反応を引用する。

実之助は、了海の前に手を拱ねて坐ったまゝ、涙に咽んで居るばかりであつた。心の底から湧き出づる歓喜に泣く濁びた老僧の顔を見て居ると、彼を敵として殺す事などは、思ひ及ばぬことであつた。敵を打つたどゝ云ふ心よりも、此の羸弱い人間の双の腕に依つて成し遂げられた偉業に対する驚異と感激の心とで、胸が一杯であつた。彼はあざり寄りながら、再び老僧の手を執つた。二人は其処に凡てを忘れて、感激の涙に咽び合うたのであつた。(二九二頁)

桂月、亀雄の文とは異なり、「恩讐の彼方に」の実之助には「武士」という言葉が一度も使われていない。この場面の実之助は「哀れ」「情け」といった感情を了海和尚に対して一切抱いておらず、純粹にこの偉業に感激して了海和尚と喜びを分かち合っているのが読み取れる。菊池は『文藝講座』の「歴史小説論」の中で

自分の「恩讐の彼方に」のテーマは、「人間が本当に人間的な仕事に興奮する場合には、恩讐を忘れてしまふ」とでも云はうか。

と述べている。この「本当に人間的な仕事」というのは、隧道開鑿のことをさしているのだろう。つまり、「恩讐の彼方に」の実之助は、「武士」としての自分の立場、父親の仇討ちといった概念を除いて、純粹に了海と共に隧道開鑿という偉業を喜んでいることが分かる。「許す」という行為は、この場面の実之助にとっては本質的な問題ではないのではないか。また「恩讐の彼方に」は、隧道開鑿後の実之助を描かないことによってこの隧道開鑿直後の感動をより一層「武士」という立場から切り離し、純粹な感動へと作り上げているように思える。反対に「武士」という単語を使うことによって、桂月と亀雄の文は封建社会範囲内で禅海和尚の偉業を讃えているように感じる。封建社会に美化されていた仇討ちを行わないにも関わらず、実之助が封建社会の一員である「武士」という概念にとらわれてい

る。つまり、この禅海和尚の偉業は、封建社会という範囲内から見ても仇討ちと同レベル、もしくはそれ以上の偉業であることを示しているのではないだろうか。よって、この「恩讐の彼方に」の終盤の場面は、桂月、亀雄とはまったく別の立場から描かれていると考えられる。

以上のことから、市九郎の主人を殺してからお弓と逐電するまでの理由が似ている点と村人、石工に実之助の了海和尚への扱いに影響を与える役割を与えている点から艸堂の『耶馬溪案内記』、市九郎が出家するきっかけが似ている点と全体の大まかな構成がほとんど同じである点から果仙の『耶馬溪案内記』の二つが、「恩讐の彼方に」を書く上での青の洞門にまつわる伝説の主要な参考資料として、菊池が特に参照した可能性が高いのではないのかと考えられる。

ここまで、「恩讐の彼方に」の参考資料について作中の比較を行いながら考察してきた。比較を行ったことよって「恩讐の彼方に」の参考資料として菊池が扱ったのは、果仙の『耶馬溪案内記』と艸堂の『耶馬溪案内記』である可能性が高いと結論付けたが、同時に他の多くの青の洞門にまつわる伝説を扱った文献とは大きく異なる点がいくつかあることが分かった。異なる点とは、

- ・市九郎が主人を殺害する冒頭部分を丁寧に描写している。
- ・豪農の夫婦を市九郎は二人とも殺害している。
- ・実之助に市九郎の猶予を求めるのは石工や里人である。
- ・実之助が隧道開鑿後に仇討ちを行わなかった理由は武士だからとせず、

人間のなした偉業への感激を第一に挙げている。

・物語が隧道開鑿直後で終わっている。

この五点である。他の文献は、禅海和尚の隧道開鑿が大半を占めていることと、禅海和尚と実之助のその後を記載しているなど「恩讐の彼方に」よりも禅海和尚の隧道開鑿という偉業が際立つが、この五点があることによって「恩讐の彼方に」は、他の文献よりも自然と話が展開していて小説らしくなっており、禅海和尚の偉業を重視した他の文献とは一線を画した作品となっておりと考えられる。他の文献と一線を画したことによって、青の洞門の伝説にまつわる文献が多くあったにも関わらず、「恩讐の彼方に」は、菊池の出世作になったのではないだろうか。特に、冒頭部分と終盤は、ほとんどの他の文献にはない「恩讐の彼方に」の大きな特徴だと感じる。では「恩讐の彼方に」は、何に力を入れた作品なのだろうか。次の章から考察していきたい。

六、「恩讐の彼方に」の純文学性について

純粋な芸術的感興を追求する純文学に対して、芸術的価値に重きを置かないで一般大衆の興味に訴え、その要求を満足させるために娯楽的読み物として作られた作品に対し、大衆文学という呼称が大正期以降から用いられるようになった。具体的に大衆文学は、時代小説・通俗恋愛小説・家庭小説・ユーモア小説・推理小説・冒険小説などのジャンルの小説をさす。

しかし、純文学と大衆文学の境界はあいまいで、その概念は常に論議を呼んでいる。菊池は、通俗小説作家として認知されており、ここでは通俗小説も大衆文学の一つとみなしておきたい。

武川忠一(1988)「菊池寛」によると、菊池の作品が通俗小説へと移行したのは、大正九年に発表された「真珠夫人」以降だとある。前田愛氏(1988)でも、菊池が純文学から通俗小説へと転回したのは「真珠夫人」からだとも記している。そのことから、「恩讐の彼方に」は時代小説であるにも関わらず、一般的に大衆文学と分類されていないことが分かるだろう。では、「恩讐の彼方に」が芸術的感興を追求していると考えられる箇所とはどこだろうか。まず、「恩讐の彼方に」の見どころとはどこかといわれると、物語最後の市九郎と実之助の洞門開鑿によって生まれた和解場面が挙げられる。その理由は、この場面において読者を違和感なく感動へと導くことに成功しているからだだろう。この感動こそが、「恩讐の彼方に」の芸術的感興を追求している箇所だと思われる。では何故、「恩讐の彼方に」は感動へと読者を違和感なく導くことに成功しているのか。

太田瑞穂氏(2010)は、菊池が「恩讐の彼方に」を書く際に参照した案内記として小川果仙の「耶馬溪案内記」を提示した上で

『恩讐の彼方に』というテキストは、物語としては前記の案内記をたどっている。

事件の顛末のみを記したこれらの源テキストに、登場人物たちの内面的な心情を盛り込み、語り方を操作する語り手の設定こそが『恩讐の彼方に』のオリジナルテキストと言えるだろう。つまり、この小説は語りこそ、複数の源テキストと差異化された部分なのである。

と述べている。太田氏(2010)は、「恩讐の彼方に」の後半部分にあたる、第三章の後半部分から第四章の語りについて、市九郎の内面を描かないことによって第一章から第二章で語られた犯罪のストーリーから読者の眼をそらして、隧道開鑿という事業の偉大性に眼を向けさせようとしているのだと述べている。それを踏まえ、語り手の意図は過去の犯罪よりも結果の偉業を讃えるという発想に終始していると指摘している。この太田氏の言う通り、「恩讐の彼方に」は、仇討ちに焦点を置いていない作品だという論は多くある。例えば、箕野聡子氏(1992)と水島千絵氏(2006)は、八逆の一つである主殺しという大罪を犯してしまったという社会的理念封建的意識に囚われた罪の意識を持つ市九郎が、先に相手の身分に関係なく人を殺してしまったという人間本質的な罪の意識へと成長する市九郎の成長物語であると述べている。田鎖数馬氏(2014)は、市九郎が許されるまでの過程を描いた物語であると述べているなど、隧道開鑿によってたらされた市九郎の変化について述べている論がほとんどだ。本稿は市九郎のみに注目するのではなく全体を見て考察していきたいので、語りについて

深く述べている太田氏(2010)の論を踏まえて、「恩讐の彼方に」の語りに注目していきたい。

「恩讐の彼方に」の語りは、焦点化する人物が変化している。第一章から第三章前半までは市九郎、第三章後半は里人達、第四章は実之助と焦点化されている。では、焦点化する人物を変化させることによって「恩讐の彼方に」に、どういった効果があるのだろうか。

「恩讐の彼方に」は、市九郎が主人から切り込まれているシーンから始まる。その場面で焦点化されている人物は市九郎である。

自分の罪を――縦令向かうから挑まれたとは云へ、主人の寵妾と非道な恋をしたと云ふ、自分の致命的な罪を、意識して居る市九郎は、主人の振り上げた太刀を、必至な刑罰として、譬へその切先を避くるに努むる迄も、夫に反抗する心持は少しも持つては居なかつた。(二七一頁)

敵手が倒れてしまった瞬間に、市九郎は我に復つた。今迄昂奮して朦朧として居た意識が、漸く落着くと、彼は、自分が主殺しの大罪を犯したことに、気が付いて、後悔と、恐怖との為めに、其処に平臥つてしまった。(中略) 彼は、まだビク／＼と動いて居る、主人の屍体を尻眼にかけながら、静に自殺の覚悟を堅めて居た。すると、その時、次の間から、今迄の大きい圧迫から、逃れ出たやうな声が出た。

「ほんとにまあ、どうなる事かと思つて心配したわ。お前が真二つにや

られた後は、私の番ぢやあるまいかと、先刻から屏風の後で息を凝して見て居たのさ。が、ほんたうにいゝ按配だったね。かうなつちや、一刻も猶予はして居られないから、在金をさらつて逃げるでしょう。まだ仲間達は気が付いて居ないやうだから、逃げるなら今の裡さ。乳母や女中などは、台所の方でガタ／＼顫へて居るらしいから、私が行つて、じたばた騒がないやうに云つて来ようよ。さあ！ お前は在金を探して下さいよ。」と、云ふその声は、確に顫へを帯びて居た。(中略) 彼は、自分の意志で働くと言ふよりも、女の意志に依つて動く傀儡のやうに立ち上ると、座敷に置いてある桐の茶筆筥に手をかけた。(二七二・二七三頁)

右の引用は、第一章の場面の引用である。一つ目は、主人から切り込まれている理由について市九郎の心情と共に語られており、二つ目は、主人殺害後、逐電するための資金を探し始める場面である。この二つの引用から、市九郎は主体性がない人物だと読み取れる。主人の愛妾であるお弓に誘われて非道な恋をしたことによつて主人を殺害してしまい、自殺の覚悟を固めるが、お弓の声で自殺をやめ、お弓に命じられるがまま逐電の為の資金を探し始める。これらの情報から、読者は、主人を殺害した市九郎よりもお弓の方を悪として認識する。

切取強盗で生計を立てている第二章の場面でも市九郎は、主体性のない人物として描かれる。

市九郎は、主殺しの罪から、絶えず良心の苛責を受けて居た。が、けんべき茶屋の女中上りの、莫連者のお弓は、市九郎が少しでも沈んだ様子を見せると、

「どうせ兇状持ちになつたからには、いくらくよ／＼しても仕様がなぢやないか。度胸を据ゑて世の中を面白く暮すのが上分別さ。」と、市九郎の心に、明暮悪に拍車を加へた。(中略) 初の程は、女からの烈しい教唆で、つい悪事を犯し始めて居た市九郎も、遂には悪事の面白さを味ひ始めた。(二七三頁)

彼も心の底では、幸福な旅をして居る二人の男女の生命を、不当に奪ふといふことが、どんなに罪深いかと云ふことを、考へずには居なかつた。が、一旦為しかゝつた仕事を、中止して帰ることは、お弓の手前彼の心に委せぬ事であつた。(二七五頁)

一つ目の引用で、最初は乗り気でなかつた悪事もお弓の教唆によつて始めており、二つ目の引用も殺したくないという心情よりもお弓という存在を重視している。どちらの引用もお弓が市九郎を動かしているという印象が強く、市九郎は主体性がない人物だと言えるだろう。だが、第二章後半部分から、今まで主体性がなかつた市九郎に変化が起きる。それは、お弓に失望し、自分の意志でお弓の元を立ち去ることだ。

市九郎は、お弓の後姿を見て居ると、浅ましきで、心が一杯になつて来た。(中略) 自分の今迄に犯した悪事が、一々蘇つて自分の心を喰ひ割いた。絞め殺した女の眸や、血みどろになつた繭商人の呻き声や、一太刀浴びせかけた白髪の老人の悲鳴などが、一団になつて市九郎の良心を襲うて来た。彼は一刻も早く自分の過去から逃れたかつた。彼は自分自身からさへも、逃れたかつた。まして自分の凡ての罪惡の、萌芽であつた女から、極力逃れたかつた。(二七七頁)

この引用は、市九郎が、再び自分の罪を自覺して、お弓を「自分の凡ての罪惡の、萌芽」と考え、彼女の元から立ち去る場面である。市九郎がお弓を「自分の凡ての罪惡の、萌芽」と考えたことによつて、読者はより一層、お弓を惡として認識する。その惡であるお弓と市九郎が決別したことにより、市九郎が更生することが暗示されているだろう。

第三章以降の市九郎は、惡であるお弓と決別し、出家して、贖罪を求めている。

幾人もの人を殺しながら、縦令僧形の姿なりとも、自分が生き永らへて居るのが心苦しかつた。諸人の為、身を粉々に碎いて、自分の罪障の万分の一をも償ひたいと思つて居た。(二七八頁)

彼は今更に、半生の悪行の深きを悲しんだ。市九郎は、些細な善根によ

つて、自分の極悪が償ひ切れぬことを知って、心を暗うした。逆旅の宿の寢覚にはかゝる頼母しからぬ報償をしながら尚ほ生を貪つて居ることが、甚だ腑甲斐ないやうに思はれて、自ら殺したいと思つたことさへあつた。(二七九頁)

この二つの引用から、市九郎は、第二章までの主体性がなく悪事を行つてきた人物ではなく、己の過去の悪事を悔やみ苦しんでいる人物へと変化したことが分かる。そして、隧道開鑿を始めたことよつて、再び市九郎の人物像が変化する。

市九郎は一心不乱に槌を振つた。槌を振つて居さへすれば、彼の心には何の雑念も起こらなかつた。人を殺した悔恨も其処には無かつた。(中略)彼は出家して以来、夜毎に寢覚めに、身を苦しめた自分の悪業の記憶が、日に薄らいで行くのを感じた。(二八一頁)

右の引用から、悪事を悔やみ苦しんでいた市九郎は、洞門開鑿を始めたことよつて、過去の悪事の苦しみから解放され始めていることが分かる。これ以降の市九郎の心情を作品内から読み取ることができない。第三章後半から焦点化される人物が里人へと変化するからだ。

第三章後半で内心が描かれる人物が里人達へと変化したことよつて、第三章後半以降から市九郎を客観的にしか見ることができなくなる。里人

達の心情と共に客観的に語られることよつて、市九郎は、己の過去の悪事を悔やみ苦しむ人物から、里人達から馬鹿にされ続けても隧道開鑿を黙々と行う偉大な人物へと変化していく。先ほど紹介したが、太田氏(2010)は、

ここでは、語り手はまだ市九郎の意識を描いている。だが、穴が深く穿たれるにつれ、市九郎は物語の前景から退き、それと同時に語り手の焦点も市九郎の心理から離れてゆく。つまり、「一」や「二」の部分の犯罪のストーリーから読者の眼をそらして封印を施し、隧道開削という事業の偉大性に眼を向けさせようというわけである。

と第三章について述べている。太田氏の言う通り、第三章は隧道開鑿の偉業性へと読者の眼を向けさせたことよつて、市九郎を偉大な人物へと変化させたのだと言えるだろう。この第三章までを見ていくと、この小説は、市九郎の隧道開鑿という偉業を讃えている作品のように感じる。だが、この小説は第四章まで続く。

第四章からは、焦点化は仇討ちを果たしに來た実之助へと行われる。市九郎は、第四章でも隧道開鑿を行っており、第三章後半から変わらず隧道開鑿を黙々と行う偉大な人物のまま。実之助の登場によつて、第三章で封印したはずの市九郎の犯罪のストーリーを、再び読者へと眼を向けさせるが、市九郎の内面が語られることはない。ここでも市九郎は客観的に描

かれる。しかし、市九郎が更生し、里人達に慕われる人格者、善人になったと読者は知ることが出来る。

「実之助様、いざお斬りなされい。お聞き及びもなされたらうが、之は了海奴が、罪亡しに、掘り穿たうと存じた洞門で△るが、十九年の歳月を費して、九分迄は竣工致した。了海、身を果つるとも、もはや年を重ねずして成り申さう。御身の手にかゝり、此の洞門の入口に血を流して人柱となり申さば、はや思ひ残すこともムリませぬ。」(二八七頁)

「皆の衆、お控へなされい。了海、打たるべき覚え十分御座る。此の洞門を穿つことも、たゞその罪滅しの為ぢや。今かゝる孝子のお手にかゝり、半死の身を終る事、了海が一期の願ぢや。皆の衆妨げ無用ぢや。」(二八八頁)

この引用は、市九郎のセリフである。このセリフから市九郎が、罪を悔やんで反省していることが分かり、読者は、市九郎が完全に更生したことを知ることが出来る。このセリフの後の実之助の内面は、「親の敵に対して懐いていた憎しみが、何時の間にか、消え失せて」しまうと、市九郎に対して戸惑いを感じている。そうすることによって、読者は自然と仇討ちが果たされないことを感じ取ることができる。

「恩讐の彼方に」は、第一章と第二章で市九郎に焦点化を行ったことに

よって、市九郎の事情を読者に理解させ、読者を市九郎の味方にさせている。市九郎に主体性がなかったため、お弓と非道な恋をしてしまった、主人を殺害後、お弓に言われて主人の家の在金を盗んで逐電する羽目に合った、お弓に教唆されたがために、悪事を働くことになった、とすべての元凶をお弓だと読者に思わせることによって、お弓をこの小説の悪に仕立て上げた。そうしたこと、市九郎は悪というよりもお弓にそのかされた被害者のように読者は感じてしまうのではないだろうか。

第三章後半以降からは、市九郎から焦点化を行う人物を変えていくことによって、今まで焦点化していた市九郎の人物像を善人へと移行させているように感じる。第二章までは、お弓にそのかされて行動する、主体性のない人物のように描かれていたが、第三章前半は、己の過去の悪事を悔やみ苦しむ人物として描かれる。第三章後半以降からは、焦点化を市九郎から他の人物に行くことによって、偉大な人物として市九郎を描いているように感じる。また、第四章の実之助の登場で、市九郎は、更生して善人へと変化したことが読者に分かるのではないのだろうか。

「恩讐の彼方に」が何故、違和感なく読者を感動へと導くことに成功しているのかについては、もう少し、語りに注目して考察していきたい。

七、登場人物の呼称について

この語りには、焦点化の他にも特徴がある。それは、登場人物の呼称だ。

この小説には、登場人物が多く出てくるが、名前が出てくるのは、主殺しの罪を犯した市九郎（了海）、殺された主人の三郎兵衛、三郎兵衛の息子で仇討ちに来る実之助、市九郎が主を殺すきっかけとなった主人の愛妾のお弓の四人。それに一回だけ浄願寺で市九郎を教化した上人の名前らしきものが出てくる。それを数に入れたとしても、五人だけである。切取強盗を行った時の豪農の夫婦、里人達の名は出てこない。そのため、名前が複数回登場する四人の印象が強く残る。特に第一章では、市九郎、三郎兵衛、お弓、実之助の四人すべてが名前で登場する。先ほども述べたが、菊池はこの市九郎が逐電するまでの冒頭部分を丁寧に描写している点から物語の大切な場面として扱っている。その場面に名前で登場するということは、この四人が物語の主要人物と考えて間違いないはずだ。だが、主人の三郎兵衛は名前よりも「主人」という立場としての呼び名の方が多い。「三郎兵衛」と語りが表記しているのは五回のみである。

「おのれ、手向かひするか！」と、三郎兵衛は激怒した。（二七一頁）

「しまった。」と、三郎兵衛が、太刀を引かうとする際に、市九郎は踏み込んで、主人の脇腹を思ふ様、横に薙いだのであった。（二七二頁）

この引用から分かる通り、「三郎兵衛」と語りが表記するのは、三郎兵衛のセリフの後に使われる箇所が二回と、「主人の三郎兵衛は」「中川三郎

兵衛の家を出たのは」「非業の死を遂げた中川三郎兵衛は」などの説明のように使う時のみである。第一章だけで一回も語りが三郎兵衛のことを「主人」と表記していることを考えると、意図的に「三郎兵衛」と表記するのを減らしているのではないだろうかと考えたくなってしまう。

お弓も豪農の夫婦殺害あたりから、「女」といった名前以外の呼び方が目立ってきている。お弓の場合は全体を見ると、三郎兵衛とは異なり名前での表記の方が圧倒的に多い。しかし、お弓が櫛や笄を取りに向かつて以降は、名前で表記してあるのは二回のみである。

市九郎は、お弓の後姿を見て居ると、浅ましきで、心が一杯になつて来た。死人の髪のを剥ぐ為に、血眼になつて駆け出して行く女の姿を見ると、市九郎はその女に、曾つて愛情を持つて居た丈けに、心の底から浅ましく思はずには居られなかつた。（中略）自分が、命を賭して迄得た女が、僅か五両か十両の瑠璃の為に、女性の優しさの凡てを捨て、死骸に付く狼のやうに、殺された女の死骸を慕うて駆けて行くのを見ると、市九郎は、もう此の罪惡の棲家に、此の女と一緒に一刻も居た堪まれなくなつた。（中略）まして自分の凡ての罪惡の、萌芽であつた女から、極力逃れたかつた。（二七七頁）

彼は、お弓に逢はないやうに、道でない道を木曾川に添うて、一散に走つた。（二七八頁）

右の引用からも分かる通り、語りが豪農の妻の玳瑁の櫛や筭を取りに行くあたりから以降、お弓のことを名前で表記してあるのは、お弓が櫛や筭を取りに行き始めた最初の一文と、市九郎がお弓との決別の為に立ち去る箇所との二回のみである。お弓の元から市九郎が立ち去る第二章以降からは名前どころか、お弓を表す代名詞さえ登場しない。第二章でお弓の小説内での役目が終わったからだろう。そのため、第三章からお弓の存在は忘れられていく。この「お弓」の呼称も三郎兵衛同様、意図的に行っているのではないかと考えられる。

名前ではなく「主人」「女」と表記することによって、三郎兵衛とお弓の存在は、多くの文の主語に名前で使われる市九郎や実之助よりも影が薄くなる。主語を名前で表記することは、その人物の存在を強く印象づけているのではないだろうか。それは、第三章の後半部分を見るとよくわかる。第三章は、里人達を焦点化しているはずなのに、読者は里人よりも心情が分かりづらい市九郎の方を身近に感じてしまう。第四章からは、実之助へ焦点化しているということもあり、市九郎を「敵」「乞食僧」「老僧」と表現している箇所が見受けられるようになる。そうすることによって、読者は市九郎より実之助の存在が身近に感じやすくなっていく。この市九郎と実之助を読者にとって身近な存在にすることによって、仇を討たずに和解するという物語のラストに自然と持っていくことに成功しているのではないだろうか。

もう一つ、登場人物の呼称で注目したい箇所がある。第一章から第三章前半で焦点化されている市九郎の呼称だ。第三章までは、「市九郎」と語りは呼んでいる。第四章の前半部分は、「市九郎」以外の呼び名も登場するようになるが、第四章後半部分からは、「了海」と語りは呼ぶ。この「了海」は市九郎が出家した時に与えられた法名であるから、第三章から登場する。しかし、語りでは「了海」という呼称を第四章後半部分までは使わない。この「了海」が自然と使われるようになるのは、里人達のセリフからだ。里人達は、第三章前半部分では市九郎を「狂人坊主」と呼んでいるが、里人達が焦点化される第三章後半部分からは「了海」と呼ぶようになっている。里人へと焦点化された場面から里人達に「了海」と呼ばせることによって、「市九郎」と「了海」を同一人物と印象付ける効果があるのではないか。この印象付けによって、第四章の後半部分からの語りの市九郎の呼称の変化を読者に違和感なく受け入れさせたのではないかと思われる。では何故、語りは第四章の後半部分から「了海」へと呼称を替えたのか。

「了海」へと呼称が替わる第四章の後半部分は、実之助が誰もいない深夜に敵が一人で槌を振るう音を聴いた場面である。その箇所を一部引用する。

入り口から二町ばかり進んだ頃、ふと彼は洞窟の底から、クワツ／＼と間を置いて響いてくる音を耳にした。（中略）実之助は、その悲壮な、凄

みを帯びた音に依つて、自分の胸が烈しく打たれるのを感じた。(中略) そのしはがれた悲壮な声が、水を浴びせるやうに実之助に徹して来た。深夜、人去り、草木眠つて居る中に、たゞ暗中に端坐して鉄槌を振つて居る了海の姿が、墨の如き闇にあつて尚、実之助の心眼に、歴々として映つて来た。夫は、もはや人間の心ではなかつた。(中略) 実之助は、深い感激を懐きながら、洞窟の月光を指し、洞窟の外に這ひ出たのである。(二九〇頁)

右の引用から、市九郎を今まで敵としか見ていなかった実之助に、了海への尊敬のような感情が芽生え始めたことが分かる。市九郎について、太田氏(2010)は「そもそも寡黙な人間であつたはずだが、「四」では一転して饒舌な人間として登場する」と指摘している。読者に同一人物として認識させるための工夫を行っているにも関わらず、太田氏の指摘した通り、違う人物のように描かれていることが言えるだろう。「市九郎」という呼び名は、前半部分の主体性もなく悪事を行ってきた人物としての印象が強いが、「了海」という呼び名は、一心不乱に目的を遂行する偉大な人物、善人という印象を与える。語りは、悪事を犯してきた時の俗名である「市九郎」という呼び名と、過去の過ちを悔やみ隧道開鑿を行っている時の法名である「了海」という呼び名の違いを、違う人物のように描くことによって具現化しているように思える。そして、焦点化している実之助の心情に合わせて語りが「市九郎」から「了海」へと呼称を替えたことによって、

悪事を犯してきた市九郎の過去が清算されてきていることを読者に印象付けているのではないだろうか。

また、太田氏(2010)は、

了海と遭遇した時の実之助は、もはや外的な動機だけで動く人間として描かれず、内面的な人間として敵討ちの当為性に疑念を持っており、相手を憎める外的な動機を希求していた。(中略) 実之助が了海を見た時、既に敵討ちが果たされないであろうことが、たやすく予測される。

と仇討ちが果たされないことを実之助と市九郎の対面した場面から予測できると述べている。太田氏の述べていることが分かるように一部、本文を引用する。

彼は、心の裡で、生来初めて廻り逢ふ敵の容貌を想像した。(二八六頁)

彼は、心の底から憎悪を感じ得るやうな悪僧を、欲して居た。然るに彼の前には、人間とも死骸とも付かぬ、半死の老僧が蹲まつて居るのである。実之助は、失望し始めた(二八七頁)

以上の引用から、確かに太田氏の言う通り、初めて市九郎を見た実之助の反応は仇を討つという気持ちよりも戸惑いの方が大きかったことが読

み取れ、仇討ちが果たされないであろうことが予測できるだろう。そして、語りが市九郎を「了海」と呼び始めた場面から仇討ちが果たされない予測をより強化しているように思われる。この初対面の際の実之助の失望は、大正六年に発表された「ある敵打の話」における鈴木八弥の心情描写ですでに実験済みであった。その作品でも、八弥は半死の盲目となった敵を打てず、仇前川孫兵衛自身が八弥のために切腹したようである。が、その辺りの経緯は省筆され、「恩讐の彼方に」の最後の隧道開鑿直後の場面ように詳述されてはいない。とにかく、太田氏の言う実之助と市九郎の最初の対面場面と、語りの「市九郎」から「了海」へと呼称を替えた場面のおかげで、最後の仇を討たないという場面に違和感なく読者を導くことが出来たのではないだろうか。

ここまで「恩讐の彼方に」の語りに注目して考察してきたが、語りは呼称に関して徹底していることが分かった。仇である市九郎、仇討ちに来る実之助、殺された三郎兵衛、三郎兵衛を殺すきっかけとなったお弓の四人の仇討ちに関わる人物の名前以外が登場しないのである。その点から、最後の隧道開鑿直後の実之助の市九郎に対しての思いが、武士として「敵を許す」ということを本質的な問題としていないにも関わらず、この小説は、市九郎と実之助の仇討ちを中心とした仇討ちを成功させない仇討ち小説のように思える。

先ほども述べたが、大正一三年「歴史小説論」の中で「恩讐の彼方に」のテーマについて

自分の「恩讐の彼方に」のテーマは、「人間が本当に人間的な仕事に興奮する場合には、恩讐を忘れてしまふ」とでも云はうか。

と述べている。この大正一三年の『文藝講座』の「歴史小説論」を見ると、「恩讐の彼方に」は、仇討ちよりも偉業の方を重視していると菊池が述べているように解釈できる。だが、同じく「歴史小説論」の中で、青の洞門にまつわる伝説の中心は「讐を見逃す、讐を討たない」といふ事」だとも述べている。テーマの方に注目すると、仇討ちよりも市九郎の偉業の方に重点を置いている作品だと言っているが、青の洞門にまつわる伝説の中心は「讐を見逃す、讐を討たない」といふ事」と述べており、逆のことを言っているように感じる。菊池は、この「恩讐の彼方に」を偉業と仇討ちのどちらを中心に描いたのか。

菊池は「恩讐の彼方に」を戯曲形式に脚色した際に題名を「敵討以上」に改めた理由について、大正九年に

たゞ、題を改めたことは、「敵討以上」の方が、此の題目を端的に現はして居ると思つたからである。

と説明している。昭和二三年三月に出版された『現代文学選』の「恩讐の彼方に」のあとがきの欄では

これは、自分の大正八年の作品である。この頃の自分の歴史小説は、封建思想に対する反抗、もしくは批判である。この話は、耶馬溪地方の伝説で、相当面白い話であるが、江戸時代の道徳に矛盾してゐるために、芝居にも浄瑠璃にもならなかつたのである。

と述べている。この二つに注目すると、「恩讐の彼方に」は、市九郎の偉業よりも仇討ちの方に重点を置いているように思える。「敵討以上」に題名を改めた理由を記したのが「恩讐の彼方に」が発表された大正九年であることと、仇討ちの関係者である四人以外の名前が作品内に登場しないことから、この「恩讐の彼方に」は、仇討ちを中心とした作品なのではないだろうか。

「恩讐の彼方に」が仇討ちを中心とした仇討ち小説だと考えると、第一章の丁寧な描写も市九郎が出家のきっかけとなる第二章の豪農の夫婦をどちらか殺してしまう構想も市九郎と実之助の仇討ち物語にするために必要なことだったのであるだろうかと感じる。豪農の夫婦を二人とも殺害することによって生存者、目撃者を作らないようにし、実之助以外の人物が市九郎の元へ仇を討ちにくる可能性をゼロにしたのである。また、実之助が市九郎の顔を知らなかったことも最後の場面の展開にするためには不可欠だったのであるかと思われる。顔を知らなかったからこそ、外的な動機を希求し、失望する展開へとつなげることが出来たのだろう。

それに市九郎が悪を犯しながらも、お弓の被害者であるように読者に思わせていたことも大きな要因だと思われる。この巧妙な計算によって、仇討をしないことを肯定する気持ちへと読者を違和感なく導くことに成功しているのではないだろうか。

「恩讐の彼方に」は他の青の洞門にまつわる伝説を扱った多くの文献とは異なり、市九郎の隧道開鑿という偉業よりも市九郎と実之助の仇討ちを中心とした作品だと言えるのではないだろうかと考えられる。だが、江戸時代の仇討ち文学は、ほとんどが仇を討つ、討たなくとも仇と和解することはない物語構成になっている。そのことから「恩讐の彼方に」は、従来の仇討ち文学からはかなり逸脱した作品となっていると言えるだろう。では、従来の仇討ちから逸脱した「恩讐の彼方に」は、当時の社会の中でどのように評価され、扱われていたのだろうか。

八、大正期の仇討ちのイデオロギ―について

菊池は、『文藝講座』の「歴史小説論」の中で

何故こんなに、話が、昔から小説にも戯曲にもならず、たゞ耶馬溪地方の口碑として残つたかといふに、無論耶馬溪が九州の一角に偏して居り、頼山陽が発見するまでは、天下に知られてゐなかつたことに依るが、も一つはこの話の中心である「讐を見逃す、讐を討たない」と

いふ事が、徳川時代の道德観と相容れなかったためであらう。

明治になつてからでも、自分が此題材を書いた大正八年までには、五十幾年経つてゐるが、それ迄にも芸術的な表現を得たことがなかった。自分が此の作品をかけたのは、偶々、我々の時代の人間主義、人道主義の思想が、此題材にびつたり合つてゐたからだ、といつてもよいだらう。即ち徳川時代には、捨て、顧みられなかった題材が、大正になつて戯曲になり、小説になり、延いては教育関係者などの歓迎を得たのは、結局狭くしては、文藝に於ける、広くしては社会一般の人生観なり道德観などの進歩に依ると云えよう。

と述べている。青の洞門の伝説を扱った多くの文献は、仇討ちよりも禅海和尚の偉業を重視してはいるが、「讐を見逃す、讐を討たない」というのもこの青の洞門にまつわる伝説を語る上では外せない。確かに「恩讐の彼方に」の参考資料の可能性がある文献は、「三人法師」と果仙の『耶馬溪案内記』以外は、大正期に発表された作品である。また、大正三年には『山水随縁記』、大正八年には山下信義・秋元米作合『禅海和尚物語…耶馬溪青の洞門由来期』大正一二年には尾原静乗『忠良たる臣民』と青の洞門にまつわる伝説を題材としたものが続けて発表されている。菊池の言う通り、この青の洞門にまつわる伝説は、当時の時代に合った作品だと言えるだろう。

田鎖数馬氏(2013)が論中でも紹介しているが、「恩讐の彼方に」は

・吉沢義則編『女子現代文学新撰』初等教育(大正一一年一月)
・高野辰之『女子国文読本』中等教育(大正一二年二月)
・吉田弥平編『現代文新鈔』初等教育(大正一二年二月)
・森山亘編『文藝読本』初等教育(大正一四年五月)
・文久社編『日本近代文芸選集』初等教育(大正一五年三月)
・新村出編『国語読本』中等教育(大正一五年九月)
など主人殺害と豪農の夫婦殺害の一連の流れは省略されて、当時の国語の教科書・副読本などに扱われていた。

今日でも

・光村図書出版『中学3年生道德 きみがいちばんひかるとき』
・東京書籍出版『中学校道德 二度と通らない旅人』
・扶桑社出版『13歳からの道德教科書』
などの道德の現行教科書でも主人殺害と豪農の夫婦殺害の一連の流れを省略して扱われている。そのことから、最後の実之助と市九郎の和解シーン、つまり仇討ちがされない場面が教育的観点からは、重視されていることが読み取れる。ちなみに、光村図書出版の道德の現行教科書は、「了海を見つけた時の実之助の気持ち」「再び了海の手を取った時の実之助の気持ち」「人が人を許すという行為について」の三つを生徒に考えさせることで、「寛容」「他者を受け入れる心」を「恩讐の彼方に」から学ばせようとしている。「寛容」「他者を受け入れる心」を道德心と捉えるならば、仇を討たずに相手を許すという物語構成である「恩讐の彼方に」は、ピタ

リの作品だと言えるはずだ。そう考えると、教科書から主人殺害と豪農の夫婦殺害の場面が省略されている理由が、市九郎が焦点化されているためだからだと思われる。市九郎が焦点化されている箇所を載せると、市九郎が物語の主人公としての扱いになるので、「人を許す」ということよりも「罪を犯しても許される」と捉えられてしまう可能性がある。大正期も現行教科書と同じ箇所を省略している点から、現代と同じ判断をしたはずだ。しかし、「恩讐の彼方に」が発表された大正期には、道德の方ではなく国語の教材に収められている。何故、当時は国語の教材で今日では道德の教材に収められているのだろうか。

文部科学省「中学校学習指導要領」（平成二九年三月版）によると、道德の授業は「道德的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」ことを目標に掲げている。「道德的な判断力、心情、実践意欲」とは、具体的に

- ・主として自分自身に関すること

「自主、自律、自由と責任」「節度、節制」「向上心、個性の伸長」「希望と勇氣、克己と強い意志」「真理の研究、創造」

- ・主として人との関わりに関すること

「思いやり、感謝」「礼儀」「友情、信頼」「相互理解、寛容」

- ・主として集団や社会との関わりに関すること

「遵法精神、公德心」「公正、公平、社会主義」「社会参画、公共の精神」「勤労」「家族愛、家庭生活の充実」「よりよい学校生活、集団生活の充実」「郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度」「我が国の伝統と文化の

尊重、国を愛する態度」「国際理解、国際貢献」

- ・主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること

「生命の尊さ」「自然愛護」「感動、畏敬の念」「よりよく生きる喜び」

を挙げている。光村図書出版の道德の現行教科書にある「恩讐の彼方に」は「中学校学習指導要領」と当てはまるだろう。ちなみに「中学校学習指導要領」の国語の項目では「社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする」「社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う」「言葉がもつ価値を認識するとともに、言語感覚を豊かにし、我が国の言語文化に関わり、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う」この三点を目標として掲げている。

明治二三年十月三〇日に発表された「教育二関スル勅語」は、

爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ学ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ徳器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ

と学習内容についてまとめている。当時の道德の教科書に当る修身教科書の内容を見ると、家庭、礼儀、自己形成、大日本国憲法や天皇などの国家についてなど当時の日本人としての常識を学ぶための内容になっており、

「教育二関スル勅語」に則っている。

国の機関である文部省が編集する「国語読本」は、神武天皇・楠木正行・乃木將軍などの人物伝、日露戦争などであったとされる日本軍の武勇伝、軍人の心得、武士道など、愛国心を育てるための内容が基本となっており、修身教科書の延長のような内容に仕上がっている。大正一二年から扱われていた文部省が編集した『尋常小學国語読本 卷一二』に耶馬溪の青の洞門にまつわる伝説を元にした「青の洞門」が収録されている。しかし教材「青の洞門」は、禅海和尚の剝責シーンから始まり、実之助は登場しない。切磋琢磨に掘り続ける和尚とそれを見ている村人の図が中心で実之助は登場しないため、主殺しのくだりは一切なく、「恩讐の彼方に」のような話の構造に仕上がってはいない。だが、仇討ちを成功させる「曾我兄弟」の話は収録されていた。

江島顕一氏(2017)は、

大正期には、第一次世界大戦を経て、デモクラシーの風潮が流れる中、児童中心主義のいわゆる新教育運動が展開されました。

従来の国家による画一的な注入主義ではなく、子供の個性や自発性、興味や関心を尊重する新たな教育実践の在り方が検索されます。こうした新教育運動は芸術教育や国語教育をはじめ、修身の教育内容や教授方法の改革にも影響を与えました。そこで展開された修身教授改革論は、子供の自由や自主性を重視した方向性が共有され、これまでの修身科の

徳目主義や教科書偏重の在り方に対して新たな知見を提示しました。しかし、(中略)「教育勅語」を前提とした修身の目的や方針を変革するには至りませんでした。

と大正期の教育の変革について述べているが、同時に修身に関しては明治期からの従来の教育から大きく外れた変革はなかったことも述べている。

国語教育について、高森邦明氏(1979)は

軍国の民を育てるという考えから自学、自動、自発などをスローガンとした心理主義、個性主義に新学校、新教育が現れる。

と大正期の教育方法について説明し、子供の自由、自発を重んじた「自由主義」いわゆる「新教育」が大正期の国語教育と説明している。

大正期と現代の教育の理念や在り方を比べるとさほどの違いは見受けられないが、文部省が編集している「国語読本」に、仇討ちが行われない「恩讐の彼方に」ではなく、仇討ちが成功する「曾我兄弟」の話が収録されていることから、大正期の仇討ちは現代とは異なったイデオロギーに支えられていた可能性が高いと言えるだろう。しかし、「新教育運動」によって作られた国語の教科書には、「恩讐の彼方に」は使われている。そのことから、菊池は「社会一般の人生観なり道徳観などの進歩」と述べてはいたが、大正期は「敵を許す」という仇討ちの考え方は、文部省が編集し

ている教科書で扱っていない点から一般的に認められてはいなかった。だが、「敵を許す」という仇討ちの考え方が登場し始めた、複数のイデオロギーが混在していた時代だったのではないだろうか。

では、それまで仇討ちはどのように扱われてきたのか。先ほども述べたが、江戸時代の仇討ち物は、仇を討つ、もしくは討たなくとも仇と和解することがない物語展開が主流だった。平出鏗二氏(1909)は、

慶長・元和このかた江戸時代を通じて(中略)小説に作られ、浄瑠璃に謡われ、歌舞伎に演ぜられ、殆どこの時代の特産物のように思われています。それは何かというと、一つは敵討ちで、一つは心中であります。

と、江戸時代では仇討ち物は好まれて多く文学作品として作られていたと述べている。伊賀国上野の渡辺数馬の敵討(伊賀越の敵討)、大阪南御堂前磯貝兄弟の敵討、江戸深川猿子橋崎山母子の敵討(母娘の敵討ち)などは、江戸時代では人気があった仇討ち物だったらしく、歌舞伎や浄瑠璃などの演目、小説の題材にされていたが、いずれも仇を討つ、仇は討たなくとも下手人が死んでいるか、下手人に重傷を負わせているなど下手人と和解することはない。

上田秋成の『春雨物語』の中に「捨石丸」という作品がある。この「捨石丸」も「恩讐の彼方に」同様、耶馬溪の青の洞門にまつわる伝説を題材にして書いた作品だが、「捨石丸」が発見されたのは昭和二十六年のことな

ので、おそらく「恩讐の彼方に」とは関係ないだろう。だが、この作品が書かれたのは間違いなく江戸時代だ。東喜望氏(1993)によると文化年間に書かれた作品であるとのことだ。『春雨物語』の写本の一つに天保一四年二月一七日に写した「漆山本」と言われるものがある。この「漆山本」には「捨石丸」は収められていなかった。その理由について転写者は、

全部式巻十回の中第七捨石丸第十回樊噲此二条はいと放埒なる事ともにて殊にくさけなるすちもこと／＼し　みるにうるさく思ふまゝ、こゝにもらしつ

と記している。つまり、この「捨石丸」と「樊噲」という作品は転写者の意にそぐわなかったため、写さなかったことを伝えている。そのことから、江戸時代は青の洞門にまつわる伝説のような「敵を許す」話は好まれていなかったことが読み取れる。

明治時代になると、明治六(一八七三)年「敵討禁止令」が発令される。明治三八(一九〇五)年果仙の『耶馬溪案内記』が出版されるが、青の洞門にまつわる伝説は、国立国会図書館デジタルデータベースで検索してみた結果、ほとんどなかった。

大正時代の仇討ちを題材とした文学、仇討ち物は、先ほども述べた通り、青の洞門にまつわる伝説を題材にした作品が登場しているため、「敵を許す」という考え方が登場し始めた、複数のイデオロギーが混在していた時

代だった。つまり大正時代は、江戸時代、明治時代とは異なる仇討ちイデオロギー過渡期の時代だったと主張できるだろう。教科書以外の文学作品でも「敵を許す」という構成ではない仇討ち物は、大正期にも発表されている。「恩讐の彼方に」とは比較的近い時期に発表された森鷗外の「護持院原の敵討」は、最終的に仇を討つが、江戸時代の仇討ち物とは異なった性質を持った作品だ。この「護持院原の敵討」にも注目して大正期の仇討ちに対してのイデオロギーについても少し考察していきたい。

九、森鷗外「護持院原の敵討」と「恩讐の彼方に」について

菊池は、森鷗外について「半自叙伝」の中で

自分は、明治時代の作家には、殆んど影響を受けなかったが、森鷗外の歴史小説からは、多少の影響を受けたと思ふ。

と述べている。また、昭和四年四月に発表された菊池の自作解説「僕の歴史物」の中で、

旧時代のもので、現代文学の歴史小説を始めて書いたのは、森鷗外博士である。

鷗外博士の影響を受けて歴史小説を書いたものは自分と芥川龍之介

であると思う。つまり歴史物語を現代小説の材料に使ったわけである。つまり、歴史的事件に新しい解釈を加へたものである。

と現代文学の歴史小説を最初に書き始めた、即ち歴史小説の祖は森鷗外であり、その鷗外の影響を受けて菊池は歴史小説を書いてきたと述べている。そのことから、菊池にとって歴史小説を書く上で、鷗外とは重要な存在なのだと言えるだろう。それに芥川も鷗外の影響を受けて歴史小説を書いたと述べているところから、鷗外は大正期に登場する若い作家たちにもまだ大きな影響を与える存在であり続けていた作家だったのではないかと思われる。だからこそ、また先ほども述べた通り、「恩讐の彼方に」が発表された時期に近い鷗外の作品、「護持院原の敵討」は、菊池に「恩讐の彼方に」を書く上で何かしらの影響を与えた可能性があるのではないかと考えられる。

「護持院原の敵討」は、大正二（一九一三）年一〇月発行の『ホトトギス』第一七巻第一号が初出である。のち、大正三年五月七日発行の単行本『天保物語』（鳳鳴社刊）に「大塩平八郎」とともに収められていた。なお、大正九年一〇月一五日には、『天保ものがたり』（銀鈴社刊）の一編としても刊行されている。「護持院原の敵討」は、天保六（一八三五）年七月一四日に、播州姫路藩酒井家の家臣の娘らが、江戸城の神田橋御門の外、護持院原において父の敵を討ったという実話に基づいている。若い女性が父の敵を討ったということもあって相当な評判となり、多くの文学作品の題材と

して使われていて、鵜外が依拠したのは、『山本復讐記(山本娘復仇記)』であると言われている。

天保四年一月二六日夜、姫路藩江戸邸で大金奉行を勤める山本三右衛門が、金部屋で宿直をしていたところ、金を盗もうとした藩邸の表小使亀藏に襲われ負傷し、死亡したことから敵討物語が始まる。三右衛門の嫡子山本宇平(二〇歳)と娘りよ(宇平の姉・二二歳)、それに三右衛門の弟の山本九郎右衛門(四五歳)の三名が敵討ちをすることになり、逃亡した敵の亀藏を追うことになったが、娘のりよは女性ということもあり、亀藏追跡の旅に出られなかったのが、代わりに亀藏の顔を見知っている九郎右衛門の家来である文吉の三人で追うことになった。しかし、わずかな手がかりのみの追跡行は困難を極め、精神・肉体的・金銭的苦痛が生じてきた。その中で、はたして敵に遭遇できるのかという懷疑を抱き始めた嫡子の宇平が、脱落してしまう。なおも追跡を続ける九郎右衛門一行は、亀藏が江戸にいるという情報を得て、天保六年七月一三日夕方、護持院原でついに亀藏を捕まえた。屋敷奉行をしていた娘のりよを呼び、亀藏に敵討ちを遂げた。以上の概略からも分かる通り、この「護持院原の敵討」は、青の洞門にまつわる伝説とは一切関係がない。もちろん、青の洞門にまつわる伝説と同じ性質は含まれておらず、題材となった話が評判になったこともあり、江戸時代のような仇討ち物に近い。だが、全く同じものではない。この「護持院原の敵討」が、江戸時代の仇討ち物と比べて特異な性質を持っている点は、仇討ちの旅に出た息子・宇平が仇討ちの旅から脱落していて、脱落

以降物語で語られることがない。仇討ちの旅の途中の苦難を細かく丁寧に描くわりに、仇討ちを終えたことへの賛美や達成感が薄い。この二点のせいで、「護持院原の敵討」は、仇討ちの苦難、虚しさを表現した仇討ちを美化していない作品に仕上がっているのではないかと思われる。

蒲生芳郎氏(1977)も、

「浅葱手拭一筋」しか持たない無頼漢を三人で取り囲んで仕止める場面は、一年半に及ぶ敵討ちの果ての幕切れとしては、いささかあっけない印象がないでもない。

と述べており、津田洋行氏(1992)も

宇平(中略)は敵探索の苦難に耐えられなくなって、懷疑(徒勞と空しさ)に陥り、その行為を放棄してしまう。(中略)が、価値観においては、敵討ちを肯定している。

と述べている。そのことから、「護持院原の敵討」も、仇討ちを美化していた、江戸時代の仇討ちのイデオロギーとは若干、異なっていると言えるのではないだろうか。大正期とは、仇討ちのイデオロギーが複数混在した時代だと先ほど述べた。この「護持院原の敵討」とは、「敵を許す」といった「恩讐の彼方に」に近い作品ではなく、江戸時代の仇討ち物とも若

干異なる展開の作品であることから、複数の仇討ちに対してのイデオロギ―が大正期に混在していることを証明した作品だと言えるのではないかと考えた。この作品は、江戸時代からの仇討ち物と「恩讐の彼方に」のような「敵を許す」仇討ち物のどちらにも属さない仇討ちに対するイデオロギ―の境目を表した作品だと感じる。

鷗外の歴史小説から影響を受けていた菊池が、「護持院原の敵討」に目を通さなかったはずがない。菊池は敵打ちを題材にした小説をいくつか書いているが、いずれも憎むべき敵を探し求め、見事に父の恨みをはらすというようなものではないと国松昭氏(2004)は指摘している。もしかすると、鷗外が従来の仇討ち物とは若干異なる性質の仇討ち物を書いたことよって、菊池は自分も従来の仇討ち物とは異なった性質を持つ仇討ち物を書くかと思つたのかもしれない。「恩讐の彼方に」は菊池が「護持院原の敵討」に触発されて書いた作品の一つなのではないだろうか。

そこで、「恩讐の彼方に」と「護持院原の敵討ち」を比較することによつて、菊池が今までの仇討ち物とはどのように変わり、「恩讐の彼方に」以降の仇討ちの考え方にどう影響を与えたのかを考察していきたい。

まず、「恩讐の彼方に」と「護持院原の敵討」が、物語の最後の場面以外で大きく異なる点は二つある。一つは語りが焦点化している人物と、もう一つは仇の性格である。

「恩讐の彼方に」と「護持院原の敵討」のどちらも三人称小説であり、「護持院原の敵討」は仇を討つ側に焦点化しているのに対し、「恩讐の彼

方に」の語りは複雑である。先ほども述べたが、第一章から第三章の前半までは、仇の市九郎に焦点化しているが、第三章の後半からは里人達へと焦点化しており、最終章の第四章は、仇を討ちに來た実之助へと焦点化している。この「恩讐の彼方に」の語りの変化について、太田氏(2010)は、

この語り手は変化する内面を描くことを主たる興味として語っているであり、変化することのない内面や人物から遠ざかっている。

と述べている。太田氏の言う通り、「恩讐の彼方に」では、焦点化している人物の心情はコロコロと変わっている。「護持院原の敵討」の登場人物たちの心情は、物語の途中で脱落する宇平以外変化するのではない。次に仇の性格の違いについて注目したい。箕野氏(1992)は、「恩讐の彼方に」の市九郎について、

社会理念に囚われた罪の意識を持った人間から人間本質的な罪の意識に目覚める人間へと成長することにより、自己救済の可能性を獲得する人物として描かれたといえる。

と述べている。畑有三氏(1973)は、「護持院原の敵討」の仇、亀蔵について、

文吉と亀蔵を分かつモメントは、前者が「実直なものだということが一目見て分かった」人物であるに対して、後者は「勝負事に負けて金に困るような男だ」という点である。

と述べている。実際に作品内から引用してそれぞれの仇の性格について見ていきたい。先ほども述べた通り、「恩讐の彼方に」の語りは章ごとに焦点化する人物を変えているのに対し、「護持院原の敵討」の語りは仇を討つ側にしか焦点化を行っていない。ここでは、心情については触れず、仇の行動とセリフ、客観的に見た仇の様子のみ注目して比較していく。分かりやすいように、記号を付けておく。

まず、「恩讐の彼方に」から引用する。

A 「しまった」と、三郎兵衛が、太刀を引こうとする隙に、市九郎は踏み込んで、主人の脇腹を思う様、横に薙いだのであつた。(二七二頁)

B が、市九郎は実之助の言葉を聴いて、少しも駭かなかつた。

「如何さま、中川様の御息、実之助様か。いや、お父上を、打つて立ち退いた者、この了海に相違ふりませぬ。」(二八七頁)

C いざ、実之助殿、約束の日ぢや。お斬りなされい。かゝる法悦の真中に往生致すなれば、極楽浄土に生るゝこと、必定疑ひなしぢや。い

ざお斬りなされい。(二九一頁)

次に「護持院原の敵討」から引用する。

a 相手は存外卑怯な奴であつた。むなぐらを振り放し科に、持つてゐた白刃を三右衛門に投げつけて、廊下へ逃げた。

b 「己はをとどしの暮お主に討たれた山本三右衛門の第九郎右衛門だ。国所と名前を言つて、覚悟をせい。」

「そりゃあ人達だ。おいらあ泉州産で、虎蔵と云ふものだ。そんな事をした覚はねえ。」

c 縄をほどかれて、しょんぼり立つてゐた虎蔵が、ひよいと物をねらふ獣のやうに体を前屈したかと思ふと、突然りよに飛び掛かつて、押し倒して逃げようとした。

A、aの引用は、主人などの自分より身分の高い相手を殺す場面からの引用である。どちらも躊躇なく相手を攻撃していることが読み取れる。B、bの引用は、仇討ち人に見つかった時の反応である。「恩讐の彼方に」の仇は、自分の罪を素直に認めているが、「護持院原の敵討」の仇は「人達だ」と白を切っている。C、cの引用は、仇討ち人が仇を討つ場面である。

「恩讐の彼方に」の仇は、自ら催促して仇討ち人に討たせようとしているが、「護持院原の敵討」の仇は、往生際悪く、助かろうと必死で抵抗している。

この三か所の比較から、物語序盤の「恩讐の彼方に」の仇と「護持院原の敵討」の仇の二人には大差がないことが分かる。「恩讐の彼方に」と「護持院原の敵討」の仇の性格が決定的に違うと言えるのは、仇討ち人に見つかった時の反応である。読者は、善人へと変化してしまった「恩讐の彼方に」の仇を敵として扱えなくなってしまうが、「護持院原の敵討」の仇は一貫して卑怯な奴であるため、読者は敵として扱える。そのことから、「護持院原の敵討」の仇に対する立場は、従来の仇討ち物に則っていると言えるだろう。それに対し、この「恩讐の彼方に」は、仇に対してのイデオロギーを崩していると考えられる。では、仇を最後まで敵として扱っている「護持院原の敵討」が、従来の仇討ちのイデオロギーと異なっている部分はどこか。それは、宇平が仇討ちの旅から脱落してしまったところである。宇平は、亀藏に殺された山本三右衛門の息子である。平出氏(1909)によると、

即ち討手となるものは被害者の子弟を始め親族であるとか、臣僕であるとか、弟子であるとか、朋友であるとか、とにかく極めて親しい関係のあるものであること

と述べており、「武士が親を殺されて坐視しているわけにはまいらぬ」ので、息子による仇討ちが過半数だと述べている。また、女が仇討ちをするのは極めて稀であり、女が仇討ちをしたという例は少ないとも述べている。

そのことから、殺された三右衛門の息子、宇平が仇討ちに行くのは当然なのであり、三右衛門の娘、りよが仇討ちの旅に参加できないのもおかしいことではない。小説内も宇平が脱落するまでは、仇討ちの旅の場面を宇平に焦点化して語っている。それなのに、宇平は仇を討たなかった。仇を討つことを諦めてしまったのだ。仇を討つのに一番ふさわしい人物が仇を討たない。この展開は、仇討ちを美化している江戸時代の仇討ちのイデオロギーとは異なるだろう。また、この仇を討つのに一番ふさわしい人物が仇を討たないという展開は、「恩讐の彼方に」の仇を討たず、仇を許してしまうという展開と通じるものがあるのではないかと考えられる。だが、「恩讐の彼方に」は敵を許してしまうので、「護持院原の敵討」よりも従来の仇討ちに対してのイデオロギーから逸脱している。この従来の「敵を討つ」という仇討ちのイデオロギーから逸脱しているにも関わらず、「恩讐の彼方に」が多くの国語の教科書に使われていたのは、それは先ほども述べた通り、語りが最後の隧道開鑿直後の和解シーンまで違和感なく読者を感じへと導いているからということもあるが、今までは焦点化されてこなかった仇にも焦点化することによって、仇を読者の敵ではなくしてしまっただけで大きいのではないだろうか。菊池は、今まで読者の敵であった仇の心理、事情を読者に理解させ、仇を敵ではなくする新しい仇討ち文学

を作り上げたのである。そうすることによって、仇を殺さずに「敵を許す」という仇討ち物が可能となつてしまい、現代までにも「敵を許す」という仇討ちのイデオロギーが道德の教科書に使われるほどに浸透してしまつたのではないだろうか。

十章 結論

菊池寛は、大分県にある耶馬溪の青の洞門にまつわる伝説を題材とした小川果仙の『耶馬溪案内記』と山本艸堂の『耶馬溪案内記』を参考文献として「恩讐の彼方に」を描いた可能性が高い。だが、禅海和尚の偉業を讃えることを重視している従来の青の洞門にまつわる伝説を扱つた多くの文献に対し、「恩讐の彼方に」は仇を討たない市九郎と実之助の仇討ちを中心とした物語となつている。従来の青の洞門にまつわる伝説を扱つた文献とは、異なる箇所を重視していると言つてよいだろう。また、作品発表が敵討イデオロギーの過渡期である大正時代ということも本作評価の大事な要点の一つだと考えられる。

もともと仇討ちを題材にした文学作品とは、仇討ちが果たされることが前提のものがほとんどであった。それは、江戸時代はもちろん、明治時代も「敵討禁止令」が発令されたにも関わらず、そうだったのではないかと思われる。大正時代も青の洞門にまつわる伝説が文献として発表されていたが、仇討ちが果たされる「曾我兄弟」の話が文部省編集の「国語読本」

に収録されていることを考慮すると、仇討ちは果たされるものだという考えが強く残つていたと言えるだろう。しかし、大正二年に発表された森鷗外の「護持院原の敵討」といった仇を討つが、従来の仇討ちとは異なつた性質を持つ仇討ちの文学作品が登場したことから、従来の仇討ちに対してのイデオロギーとは同じではなかったことが考えられる。また、大正八年に菊池寛の「恩讐の彼方に」が発表されて以降、国語の教科書に「敵を許す」ことによつて仇討ちが果たされない物語構成を持つ「恩讐の彼方に」が最後の場面だけが使われるようになるなど、大正期には複数の仇討ちに対してのイデオロギーが混在していたことが考察できる。そして今日では、道德の教科書に「恩讐の彼方に」が使われていることから「敵を許す」という仇討ちのイデオロギーが、現代に強く浸透していると言えるのではないだろうか。

菊池寛の「恩讐の彼方に」は、仇を討つことが前提であつた従来の仇討ちに対してのイデオロギーから大きく逸脱した作品だと言える。大きく逸脱した作品にも関わらず、人々に受け入れられてきたのは、違和感なく読者を感動へと導く工夫があつたからであろう。焦点化する人物の変化、特に敵であつた仇に焦点化を行い、読者の敵ではなくしてしまつたこと、また登場人物の呼称の変化など、読者を導く巧妙な表現の計算があると思われる。「恩讐の彼方に」は、今まで敵としてしか扱われてこなかつた仇に焦点化を行った、画期的な作品だと言えるのではないだろうか。

(さいとう・ちほ 二〇一七年度学部卒業生)

※菊池寛の文章の引用は、すべて最新版の『菊池寛全集』（高松市菊池寛記念館、文藝春秋）に拠る。「恩讐の彼方に」の本文は、引用の際（ゴシック体部分のみ）、頁数を付した。振り仮名は省略した。

※その他に、地誌等で使用した本文、参考文献は次の通り。

- ・『御伽草子』日本古典文学大系岩波書店、一九五八年七月
- ・大町桂月『桂月全集 第三卷』（興文社、一九二六年三月）
- ・谷口梨花『増訂汽車の窓から（西南部）』（博文館、一九一三年）
- ・森鷗外『鷗外歴史文学集 第二卷』（岩波書店、二〇〇〇年一〇月）
- ・上田秋成『春雨物語』（三弥井書店、二〇一二年四月）
- ・文部省編集『尋常小學国語讀本 卷十二』（大阪書籍、一九三七年四月）
- ・古田東朔編集『小學讀本便覧 第七卷』（武蔵野書院、一九八四年一〇月）
- ・『中学道德三年 きみがいちばんひかるとき』（光村図書、二〇一六年三月）
- ・「国立国会図書館デジタルコレクション」国立国会図書館
- 『耶馬溪案内記』天下第一の名勝『耶馬溪案内記』『奇談哀話』『新版日本仇討』
- ・「中津耶馬溪観光協会」中津耶馬溪観光協会
- <http://www.nakatsuyaba.com/>（二〇一六年二月一日閲覧）

・「文部科学省ホームページ」文部科学省 「学習指導要領（平成二九年三月版）」「教育一関スル勅語」

【参考文献】

- ・東喜望(1993)「春雨物語「捨石丸」と青の洞門」(『紀要』、一九九三年三月、白梅学園短期大学)
- ・江島顕一(2017)「完全実施前に押さえておきたい道德の歴史 道德教育への歴史—戦前の修身科」(『道德教育』、二〇一七年一月、明治図書出版)
- ・太田瑞穂(2010)『「恩讐の彼方に」論』(『文学のこころ』とてば、二〇一〇年十二月、七月堂)
- ・大西良生(2002)「「恩讐の彼方に」私考」(『文藝もず』、二〇〇二年六月、菊池寛記念館)
- ・大屋幸世(1988)「千葉亀雄」(『日本近代文学大辞典』、一九八八年一月、講談社)
- ・片山宏之(1991)「菊池寛「恩讐の彼方に」をめぐって—その成立および性格」(『近代文芸新放』、一九九一年三月、新典社)
- ・蒲生芳郎(1977)「鷗外の歴史小説・その明暗の構造—「護持院原の敵討」をめぐって—」(『文学』一九七七年一月、岩波書店)
- ・国松昭(2004)「菊池寛の父親像」(『国文学 解釈と鑑賞』、二〇〇四年四月、至文堂)

- ・重友毅(1958)「捨石丸について」(『国語と国文学』、一九五八年五月、東京大学国語国文学会)
- ・高森邦明(1979)「大正新教育と作文教育の革新」(『近代国語教育史』、一九七九年一〇月、鳩の森書房)
- ・田鎖数馬(2014)「菊池寛『恩讐の彼方に』の改作について」(『京都大学国文学論叢』、二〇一四年三月、京都大学大学院文学部研究科国語学国文学研究室)
- ・武川忠一(1988)「菊池寛」(『日本近代文学大辞典』、一九八八年一月、講談社)
- ・津田洋行(1983)『護持院原の敵討』論—宇平の造形を中心にして—『文学研究』、一九八二年三月、明治大学
- ・畑有三(1973)「護持院原の敵討」(『国文学 解釈と教材の研究』、一九七三年八月、学灯社)
- ・平出鏗二(1909)『敵討』(一九九〇年四月、中央公論社)
- ・前田愛(1968)「大正後期通俗小説の展開」(『文学』、一九六八年六月、岩波書店)
- ・三瓶達司(1970)「『恩讐の彼方に』と『三人法師』」(『国語科通信』、一九七〇年十一月、角川書店)
- ・水島千絵(2006)「『舞台的』戯曲—『恩讐の彼方に』と『敵討以上』を手がかりに—」(『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』、二〇〇六年九月、早稲田大学大学院教育学研究科)
- ・箕野聡子(1992)「菊池寛に於ける小説と戯曲—『恩讐の彼方に』と『敵討以上』とを題材として—」(『日本文芸研究』、一九九二年一〇月、関西学院大学日本文学会)
- ・李志新(2016)「菊池寛『恩讐の彼方に』管見—その材源と女性について—」(『日本文学研究』、二〇一六年一月、梅光学院大学日本文学会)